

オンライン多人数会話のほめと応答の発話連鎖

—参加者がほめを通して達成する行為—

福永 佳代子(大阪大学大学院生)

1. はじめに

コロナ禍において、オンラインの飲み会や食事会が広がり、新しいコミュニケーションのスタイルとして受け入れられつつある。本稿では、オンライン懇親会の多人数会話における話題提供のほめに着目する。参加者が、離れた空間をつなぐ画面の情報を利用し、相手の空間について気づいたことを肯定的に示し、話題を開始する行為を検討する。その気づきの発話は他の参加者の名前を言及、又は暗示していたことから次の話者が選択されていた。同時に、他の参加者が、切り出された話題を受け入れるかどうかの反応を示す場ともなっており、いかにして複数の参加者が話題を展開していくのかを考察する。

話題提供については、Schegloff (2007) は話し手が一方的に話題を提供するのではなく、その話題を受け入れるかどうかの立場は受け手の応答に表れていると述べている。又話題を開始する手続きとしては「はい/いいえ」で答えられる質問が最も多いと言及している。又、Goodwin & Goodwin (2012) は移動中の車から見える風景の気づき (noticing, Sacks, 1995) が話題のきっかけとなると述べている。本稿で扱うオンライン懇親会のデータでも、気づきを提示し、話題を開始する手続きが、対面とは異なる組み立て方で、ほめや評価が用いられていた。それは画面が参加者に共有されていることによるものであり、話題を複数の参加者で模索するためのものであると考えられる。

2. 先行研究

オンライン懇親会では参加者は空間を共有せず、次の発話者を決める手段となる視線も対面のように利用できない。砂川 (2022) は限られたウェブカメラの画面越しに参加者が繰り返しの発話により応答を促し、離れた空間の相互行為の組織化や参与構造の結合を手助けする行為を分析している。彦山、横森 (2024) はオンラインビデオの3者会話における視線の果たす役割について分析している。それによると、画面の正面を向いたり視線を逸らせたりすることが、次の話し手になるかどうかの資源となっており、対面の会話とは異なることを指摘している。このように、オンラインでは次の話者選択に工夫が必要だが、懇親会は多人数であり、順番交替が更に複雑である。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) によると、現在の話し手が次の話し手を選択すれば、選択された者が次の発話順番を取る権利を得て義務を負うとしている。2者会話では、次の話者の名前を言及し順番を割り当てなくても、質問等の発話行為で宛先が明らかになることが多いが、多人数の会話となるとそうではない。Lerner (2003) は、多人数会話において話者選択の技法には視線、名前の言及等による明示的な方法以外に、共有する経験の有無といった語る資格が判断材料となると述べている。又、そのような話者選択の方法を用いても、選択された話者以外の他の参加者がターンを取ることがあると指摘している。オンライン懇親会では、話題の開始部においてどのように話者選択がされ、複数の参加者がどのように発話に参加し、会話を組み立てていくのだろうか。

3. データ

本稿が扱うデータの分析に使用したのは、職場の同僚とのオンライン懇親会での多人数の雑談(約120分)の録音、及びその文字化資料である。録音データは、会話参加者のうちの一人の自宅で、その参加者が2021年7月に録音したものである。当時はコロナウィルスの感染拡大が懸念され、参加者はリモートワークが推奨されており、同僚と顔を合わせる機会が減っていた。そのような状況で、職場の同じチームの女性5名と男性1名によって、親睦を深め、業績につなげる目的でオンライン懇親会が行われた。メンバーは人事に関わる上下関係はなく、社内の日々の人間関係や仕事の内容について知識と経験を共有している。録音の文字化資料から、他者をほめる発話とその応答の発話連鎖を、話題ごとに抽出した。本稿ではほめが話題開始部に表れ、話題を切り出している断片を3つ取り上げる。

4. 分析

懇親会は、一定の時間参加者が共に過ごし、何か話題を探して取り上げ、展開し、親睦を深めるためのものである。ある話題が閉じると、参加者は次の話題を探すことになる。事例1, 2は、話題の連鎖が閉じた後の断片である。

事例1は、参加者のうちのTがオンライン懇親会の途中で、部屋を移動した後の会話である。この懇親会は夜開かれており、Tは子供の就寝時間になり、子供に話し声が聞こえないように移動した。事例1の会話の前は、Tが移動していることを「移動中」と他の参加者に笑いながら報告している。0.5秒の間を経て、Tは「移動した」と移動が完了したことを伝えている。

Yは「移動、移動」とTの言葉を繰り返し、他の

参加者が笑い、Tの移動を理解したことを示している。1行目でYは、参加者に共有されたTの画面の変化をとらえ、気づきで話題を切り出している。その気づきは、Tの家のほめとして組み立てられている。また、1行目の特徴は、気づきを示す発話に、場所を示す指示詞や「見て」といった注意を促す言葉が使われていないことである。それは移動中、Tの画面の背景の変化が参加者に画面を通して共有されており、Tの移動を画面で視覚的に確認していたからである。オンライン懇親会は共有された視覚情報が画面だけであり、この点が対面の懇親会や、Goodwin & Goodwin (2012)の車の中での家族の会話とは異なる。1行目のYの発話はほめでありながら、気づきの提示でもあるため、応答はほめの受け手以外の参加者にも機会が与えられている。2行目でIは1Yの気づきの対象を認識したと同時に、ほめに同意する立場を表している。又、それは話題を受け入れたことをも示している。その後、ほめの受け手であるTが3行目で「だけ」を用いてマイナスの側面としての形式で事実を伝え、ほめを回避している。しかし、Yが4行目でほめ直し、6行目でMがYのほめをアップグレードして同意している。又、参加者2I, 6Mのほめの同意により、Yの切り出したほめの話題が他の参加者に受け入れられたことが表されている。それにより応答を促されたTは

8行目で情報提供せざるを得ず、冗談っぽく事実を伝え、ほめを回避している。その8Tの情報をもとにYは12行目でTに質問している。このように、1Yのほめが3Tの情報を、4Y, 6Mのほめが8Tの情報を引き出している。これらのほめは、質問のような拘束力はないが、相手の情報開示が期待されている。事例1の気づきのリソースは参加者に共有されている画面の視覚的な情報であったが、次に取り上げる事例2は聴覚的な情報の気づきで話題が開始されている。徳永(2022)が離れて暮らす親子を対象に遠隔共食を行った報告では、話題が途切れても目の前の食べ物や、iPadから聞こえてくる相手の家のテレビ番組の内容に言及できることが挙げられている。このように、オンラインの食事会では、視覚、聴覚の情報が話題提供としてとりあげるきっかけになると考えられる。

事例2は、事例1と同様に話題が閉じた後のものである。Tの子供の声が画面を通して聞こえてきたのをMが知覚し、1行目で気づきを報告している。それと同時に、肯定的な評価の言葉を用いて、Mの気づいたことへの立場を示している。この1行目でも注意喚起の言葉がないのは、それまで子供の声が聞こえており、参加者にすでに共有されていた情報だからだと考えられる。そのため、Tの子供の声であることが共有されており、事例1の1Yのように次の話題の中心となる人の名前を言及しなくても、話題となる人を選ぶことができる。1Mの肯定的な評価に2I, 3Yの同意が発話され、話題を受け入れ、同じ立場であることを表している。このように、話題開始のほめや評価は、次の話者を選択しているが、選択された話

【事例1】

- 1 Y: T,おうち明るくて、きれいですね.
 2 I: [ほんまや
 3 T: [全部電気つけてるだけで:h[hhh
 4 Y: [え[:;明る:い:..
 5 M: [hhh
 6 M: 明るい,うん真っ白.
 7 (1.7)
 8 T: 洗面所(.)hh[hh
 9 I: [hhhhh
 10 M: [hh[hh
 11 Y: [hh
 12 .h¥なんか¥,追いやられてしまいました?:すみませ:ん=
 13 T: =(え),ちがうちが:う

【事例2】

- 1 M: かわいい声する
 2 I: [ねえ
 3 Y: [°う:ん°
 4 (子供の声)
 → 5 Y: へえ:, 小さいお子さん癒されますね:..
 6 I: ほんまやね:..
 7 (1.3)
 8 (子供の声)
 9 T: いや:, ¥ない¥
 10 (子供の声)
 11 Y: 大変ですか:, [T: ?
 12 T: [大変: .hh
 13 Y: 大変ですか:..
 14 T: 適切にしてるから大丈夫,nhhh h

者が必ずしも次のターンを取るわけではなかった。それは、ほめや評価が気づきの提示を表現する方法として用いられていたためだと考えられる。気づきで取り上げられた対象物を、他の参加者が認識し、参加するスペースが同時に作り出されているのである。1Mの評価に対するTの反応はなく、Yが5行目で1Mが切り出した話題を気づきの報告の形式から、「お子さん」を主題とした形式で、「癒される」という参加者の感じた気持ちを「ね」を用い、参加者が共通に肯定的な認識しているものとして発話している。それにIが6行目で同じ立場を示すが、5Yの肯定的な立場に対する9Tの不同意は、沈黙を経た応答であり、非優先的な特徴が表れている(Pomerantz 1984)。その9Tの応答を機に、11Yの質問はTの同意、優先的な応答が表れる形式(Schegloff 2007)に調整されている。又、11Yの質問はTの子育ての話題への興味を示している行為でもある。このように、気づきで開始された話題について2I, 3, 5Yで発話し、話題の受け入れと継続を示している。それと同時に、気づきで示された肯定的な立場に、参加者も同じ立場を示している。しかし、9Tで異なる立場が示され、11Yで質問が調整され、話題が展開されていた。一連の相互行為を経て、参加者に話題が受け入れられるか、話題となる人が触れてもよい領域かどうかを確認され、相互の視点が話題とともに展開され立場も調整されている。

次に取り上げる事例3は事例1, 2と異なる点が2つある。1つ目は、話題の切り出しの発話である。事例1, 2は話題が閉じた後の会話で気づきの報告により話題が開始されていたが、事例3は話題が完全に閉じる前に、参加者が質問によって話題転換している。2つ目は参加者の話題を受け入れるかどうかの表明である。事例1, 2は気づきで切り出された話題が、その後続く他の参加者の発話によって受け入れられ、質問等で話題が展開されていく手続きであった。それに対し、事例3は、他の参加者の話題の受け入れの立場がすぐに示されないものである。この事例から、気づきの報告は話題が閉じた後に生じる話題の糸口探しの手続きであること、ほめや評価の後の参加者の反応によって、話題の内容が模索されることを検討する。

事例3の前の会話は参加者の家族の年齢の話題であり、1行目でMが質問をして話題転換している。又、1MではYをほめて話題を切り出している、次のターンで2Yが不同意を示し、3行目でMが1行目のほめの根拠を伝えている。しかしその後、短い沈黙があり、他の参加者の発話が見られず、話題の受け入れの立場が示されていない。その理由として考えられるのは、事例3の1Mのほめの対象はYの外見であり、言及しにくい話題であることである。また、気づきの報告と質問では、次の話題の中心となる人物を明示的に示すという点では同じであるが、相手に応答を要求する拘束力が異なる。事例1, 2のように話題の切り出しが気づきの報告であれば、他の参加者はその気づきの対象を認識したことを表明するように参加の枠組みが拡大される。一方、質問は相手に強く応答を要求する。4行目で参加者の話題受け入れの反応がないことから、5行目でMは自分のマイナスの側面を持つ生活習慣を比較することでほめの根拠に話題をずらしている。6行目でそのずらした話題に関連するYの外見の背景

にある生活習慣をTが冗談交じりで取り上げ、話題を受け入れている。それは同僚である参加者が共有している事実であり、Yが同意する受け入れられやすい形で示されている。Yは7行目でその事実を認めている。それを受け、Mは8行目で水筒に話題を移し、参加者の反応に応じて話題を展開している。このように、話題が切り出された後、話題が維持されるかどうかは他の参加者の反応が影響する。参加者の反応が不在であれば、話題の焦点がずらされ、受け入れられる内容が相互行為によって模索

【事例3】

- 1 M: Yちゃん、メッチャ若く見えるっしょよ
 2 Y: え: : , : 見えないです:
 3 M: え: 肌きれい:
 4 (0.7)
 5 M: わたしこんなあまいものばかり食べちゃうから
 6 T: 毎日水飲んでんもん、h[h
 7 Y: [hhh. h. h ばれてますね、h, h
 8 M: あの麦わらみたいなさあ、水筒すごいよね
 9 Y: [. h. h. h
 10 Y: . h. h う: もう: : , めっちゃ飲んでますよね、水[ね: :
 11 M: [年がら年中
 12 M: 麦藁の水筒やねん
 13 Y: そうです. hhhhhh

されていく。すなわち、ほめによって切り出された話題が参加者の反応を見る機会を作り出し、それを基に明示的に選択された話者について質問をしたり、共有する知識を取り上げたりすることで、複数の参加者が共同で話題を展開している。

5. まとめ

データから分析した結果、話題が閉じた後、参加者は画面上から得た視覚、聴覚情報を基に気づきの報告をしていた。

その背景には、これまで対面で行っていた懇親会が、オンラインで画面を通して自宅が写されることで、相手の見えなかった個人的な一面に触れることができることもあるだろう。その一面は話題を探すという行為が繰り返される懇親会において、参加者の興味をひきやすい材料となる。画面を通して相手に関する気づいたことを報告し、参加者に共有することで話題の糸口が作られていた。その気づきの報告の形式では、場所を示す指示詞、「ほら、見て」といった注意喚起や間投詞の「あ」は発話されていなかった。それは、画面が限られ、情報が共有されているためと考えられる。気づきの報告は、対象へのほめや肯定的な立場が示され、対象とともに参加者に共有されていた。このように、気づきがほめや肯定的な評価として組み立てられることで、他の参加者に対象を認識したこと、認識を同じように肯定的に捉えるかという立場を示す機会を与えていた。他の参加者の参加は、話題を受け入れるかどうかという表明でもあり、相互行為によって、共同で話題を探っていた。話題が受け入れられた後は、質問によって興味が示され、展開されていた。話題が閉じた後の話題の開始は、気づきが用いられていたが、話題転換の際には気づきではなく質問が用いられていた。又、気づきで話題の糸口が作られ、話題が受け入れられた後には質問が用いられていた。重光 (2020) は、自然会話コーパスの雑談を分析した結果、質問の出現比率が少なく、回答者が答えることをためらっていたことから、日本の社会規範では、雑談会話の中での情報を求める質問は好ましいと捉えていないことを指摘している。増田 (2006) によると、質問は相手に強力な働きかけを行う行為であり、会話を進めていくには相手にうまく働きかけ、相手や状況への配慮が必要となると指摘している。本稿のデータで見られた質問の前に気づきで話題を切り出す行為は、触れてよい内容を探る機会を作り出し、話題を展開する準備であるとも考えられる。その気づきが、ほめや肯定的な評価として組み立てられることで、ほめの受け手を次の話者に選択しつつ、他の参加者にも立場を表明する機会を与え、会話が続けられやすいように組み立てられている。又、気づきは質問ほど相手に応答を強要しない、受け入れられる話題かどうか反応を見て調整をするという点で、受け手への配慮につながっているのではないだろうか。

謝辞

収録にご協力いただいた参加者の方々、本稿の執筆にあたり有益なコメントをいただいたバーデルスキー・マシュー氏とそのゼミの方々、横森大輔氏、平本毅氏と関西 EMCA 互助会の参加者の方々に深謝する。

参考文献

- 彦山華・横森大輔 (2024). オンラインビデオ会話における話者性の交渉に視線配布が果たす役割 日本音響学会音声研究会資料, Vol.4, No. 1.
- Goodwin, M. H. & Goodwin, C. (2012). CarTalk: Integrating texts, bodies, and changing landscapes. *Semiotica*, 191, 257-286.
- Lerner, Gene. H. (2003). Selecting next speaker: The context-sensitive operation of a context-free organization. *Language in society*, 32 (2), 177-201.
- Pomerantz, Anita. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some Features of Preferred /Dispreferred Turn Shape, In J. M. Atkinson & Heritage J (Eds.), *Structure of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp. 57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, Harvey. 1995 *Lectures on conversation*. 2 vols., Gail Jefferson (ed.). Oxford: Basil Blackwell.
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff A. and Gail Jefferson. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*. 50(4).696-735. (ハーヴェイ・サックス. エマニュエル・シュェグロフ. ゲイル・ジェファーソン. [西阪仰訳] 会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述 会話分析基本論集— 順番交替と修復の組織 pp. 7-153. 世界思想社. 2010.)
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I*, Cambridge: Cambridge University Press. 98-113.
- 重光由加 (2020). 質問行為に伴う配慮—初対面会話と親しい者同士の男性の雑談より— 日本語の自然会話分析 くろしお出版 pp. 85-111.
- 砂川千穂 (2022). 遠い外界に参加する—インタラクションの足場づくりと参与構造の調整 外界と対峙する ひつじ書房 pp.28-51.
- 徳永弘子 (2022). 「食事」がつかなく遠隔地間親子コミュニケーション 外界と対峙する ひつじ書房 pp. 52-73.
- 増田 将伸 (2006). 質問を用いた働きかけのストラテジー—質問の二面性の反映として— 待遇コミュニケーション研究 4, 49-63.